

旧約聖書

イザヤ書8章16節～17節(p. 1073)

新約聖書

マタイ福音書25章1節～13節(p. 49)

- 1、今日から待降節（アドヴェント・来臨の意）である。教会暦でこの時期に読まれる聖書テキストの一つが、マタイ25:1以下「十人のおとめ」の譬である。「主の来臨を待つ」ことへの信仰を強調するゆえに選ばれたと思う。
- 2、この譬えは基本的にイエスに遡るものであるが、原始教会及びマタイ福音書著者の付加と説話で強調点の変化がある。ゆえ現在のテキストには二重の歴史的背景がある。後者の関心は、終末（イエスの来臨）はすぐ来るといふ初期時代が過ぎて、「終末の遅延」の時代（中間時）を信者がどう生きるか（倫理）に重点が置かれた話になった（5, 7, 11-12, 13は、付加部分）。二重の層をもつテキストを前にして、聖書学者（エレミアス他）は、もともとの話は①花婿とたいまつ行列の少女たち。②花婿到来による少女たちの混乱。③予備の油を用意していた少女たちの宴会への参加。基本的に花婿到来の物語であり、「神の国〔支配〕は近付いた」（マルコ1:15, ルカ10:9）のイエスのメッセージの枠内にある。「予備の油」を備えて置くべきだといふ生活態度（倫理）への教訓に重点が移されたのは、後代であって、いつの間にか恐ろしい裁きの物語に変質してしまった。「予備の油」とは何か。それは危機の自覚の深さの表れに過ぎない。原意は「思いがけない日（時）」（マタイ24, 44:50）への自覚の深さへの促しである。だから、基本は「神の支配（マタイ「天の国」）」、つまりイエスの到来、イエスがいまし給うことへの自覚をいついかなる時にも持っているかが問われている事になる。
- 3、この話は、花婿は到来した、という喜ばしい話である。律法を守れない、当時の遊女や「らい病」人、「地の民」という被差別者で、「選ばれたイスラエルの子」でない者が、救いに与かる「神の国」が到来したという喜ばしいメッセージである。その自覚が欠けた者（選民の誇りにあぐらかいている者、律法学者など）が、おいてきぼりになっている現実を言っている。ランプも持っている、油も持っている、だが、救いがどんてん返してやってくるという危機への自覚が欠けたものを「予備の油」がないと例えたのである。「よく聴きなさい。取税人や遊女はあなたがたより先に神の国にはいる」の逆説への無理解が決定的な意味を持っている。
- 4、「神の支配」（イエスの到来）のメッセージは、喜ばしいものであったのに、原始キリスト教は、審きの厳しさを語り、倫理の質を問う物語に変えてしまった。「思慮深さ」は倫理（人間の備え）の問題ではなく、神への委ねへの信頼の問題である。例えば、大地震に備えるといっても、最後のところ神に委ねた日頃の生き方が、自己の在り方、他者との連帯がものをいう。「人は生きてきた様に地震にあう」とは地震の最中で感じた、私の実感である。
- 5、三浦綾子さんは「この土の器をも」の中で、教え子が自殺したのち、彼を責めた事を悔い、「悔い改められなかったら、悔い改めなくともいい。いつでも先生の家

にいらっしゃい」と書くべきだったと、愛の欠如<sup>を悔</sup>り、その後「他の子供たちに心を使うようになった」と書いている。祈るつつ待つ生活への変化である。